The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	宗教的信念における共通の因子 : 8カ国調査の結果から
Author(s)	川端, 亮
Citation	大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 2016, 42, p. 189-208
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/57245
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

宗教的信念における共通の因子
－８カ国調査の結果から－

川　端　　亮

目　次

１．はじめに
２．宗教意識の測定
３．調査の概要
４．結果
５．おわりに

論文タイトル：宗教的信念における共通の因子
－８カ国調査の結果から－

川　端　　亮

１．はじめに

グローバル化は、宗教研究にも大きな影響を与えている。1980 年代より国際比較のための大規模な社会調査が実施されるようになってきた。1981 年から始まったヨーロッパ価値観調査と世界価値観調査、1985 年より始まった ISSP (International Social Survey Programme) 調査などによって、数十カ国が参加する各国を比較する国際比較研究が行われるようになり、数多くの分析結果が出版されている (Arts and Halman eds. 2004; Arts and Halman eds. 2014; Haller, Jowell and Smith eds. 2009)。それらの国際比較調査研究の中で、これらの研究組織が立ち上がったヨーロッパでの重要な価値、すなわち宗教が占める位置は小さくない。つまり、各国の宗教性を共通の尺度で測り、国際比較する計量分析が行われている。その成果は数多い（たとえば、R. Inglehart & W. Baker 2000、L. Halman & V. Draulans 2006、M. Haller, R. Jowell & T. Smith eds. 2009 など）。

日本も世界価値観調査や ISSP 調査への参加国の一つである。日本でも世界の数十カ国と同じ調査票によって調査が行われ、その調査データが得られている。データが存在するので、日本の宗教も他の国々と比較し、国際比較研究として成果を上げることができそうである。しかし一方で、これらの調査では、日本の宗教性を正しく測っていないのではないかという疑問が呈されている。

なぜなら、日本は宗教文化が他の国々と大きく異なるからである。例えば欧米と比べれば、それらの国の多くで主流であるキリスト教に関して、日本ではその信者は１％程度であり、また人口のおよそ７割の人々は宗教を信じていないと表明する。日本人の多くの人は無宗教を表明する一方で、宗教的な心は大切であると思う人は７割、初詣をする人は人口の８割、定期的にお墓参りをする人は６割という数字から考えれば、これらの日本社会の実態は、一神教のユダヤ＝キリスト教社会からみれば、不可解ともいえるだろう。

そもそも日本の場合、宗教の基本的な概念すら、欧米と大きく異なる。たとえば ISSP 調査では、「神」について There is a God who concerns Himself with every human being personally という質問文が使われている。Manabe (2011) は、この質問文に対して、

> Of course, this question text implies four concepts: (1) God initiates active

involvement with humans, which might be thought of as “grace,” (2) God and humans have a personal relationship, a so-called “me and you” relationship, (3) Awareness of god as male, as reflected in the term “himself,” and (4) the concept of a single god as reflected in the use of the singular article “a” (“a God”)

と指摘している。神々が存在し、その中には女神もいる日本の宗教文化と大きく異なることは、明かであろう。これまでの欧米で行われていた宗教の測定によると、国際比較研究の分析では、日本は宗教心の低い、例外的、周辺的な位置におかれてきた。しかしそれが本当に正しいのであろうか。その測定に問題がないのだろうか。

宗教に関わる日本の研究者のほとんどは、国際的に共通する基準や尺度、概念では日本の宗教を正しく測ることができていないと考え、そのような基準などを用いた国際比較研究よりはむしろ、欧米とは異なる日本独自の宗教理論、尺度開発などが考えられてきた。たとえば、宗教社会学の代表的な分野である宗教類型論から例を引くと、キリスト教圏で発達した Church/ Sect という概念は、早くから紹介されながらも、当初から国内の宗教に適用するのは難しいと指摘されていた (Yanagawa and Abe 1978)。日本において Church/ Sect という概念は、それらはただ音をそのままローマ字読みする「チャーチ」「セクト」というカタカナの用語になっただけで、該当する日本語の翻訳語を見いだすこともできず、日本宗教の概念に翻訳もできなかった。日本の類型論の研究においては、内棲型とか、隔離型とか、なかまー官僚制連結モデルなど、欧米の研究者はまず知ることのない、独特の類型論を発展させてきた [1)]。

計量的な宗教意識の研究においても同じである。英語で書かれた代表的な論文として、Kaneko(1990) をあげることができる。彼は、日本の民俗宗教の信仰者を対象に、主成分分析によって、宗教性を抽出した。そこでは、Pro-religiousness, Belief in Soul, Belief in Guardianship, Ancestor Worship, Modern Rationalism, Fork Observance の６因子が抽出されている。Kaneko(1990: 7-9) では、「Factor I（Pro-religiousness：著者注）seems to reflect either a positive stance or a neutral non-involvement toward religion in a general sense」、Belief in Soul は、「This factor features attitudes toward the dead」、そして Belief in Guardianship については、「All the Items in Factor III (Belief in Guardianship) seem to give the worshippers a feeling of tranquility or consolation, because they feel Buddha or the gods are protecting them.」と説明している。ここで金児が用いた質問文には、アメリカの宗教に関する調査ではみられるであろう、唯一絶対の神 (God) も神の赦し (Forgiveness) も変えられない運命も、いずれも出てこない。つまり、日本の宗教研究で取り上げられる宗教性の因子は、アメリカを中心とするキリスト教的宗教性で取り上げられる因子とは全く異なっているのである。

確かに日本の宗教研究は、教団ごとの発展の歴史や日本独自の宗教性を描く優れた業績を上げている。個別の宗教教団研究や日本独自の宗教、宗教文化の研究としては大きな価値があるが、日本国内の教団間を比較し、共通点や違いを明らかにすることから始

まり、さらには日本の宗教とキリスト教やイスラム教などの海外の普遍宗教との比較は、行われていない。日本の宗教研究は個別教団性を脱せず、グローバル化していないのである。

２．宗教意識の測定

2-1. 宗教的信念の多次元的な測定

日本と他の国々、地域を包括する宗教研究を行うためには、宗教とは何かを問い直し、宗教性をどのように測定するか、が最大の問題である。本稿では日本の宗教だけにとどまらず、海外の国々、海外で広まっている宗教を幅広く含む宗教意識を測定するための試験的な調査の結果を報告する。

宗教の計量的な調査研究においては、Glock and Stark(1965) 以来、信念以外の経験の側面や結果の側面も重視されてきており、本来はさまざまな意識的な側面とともに、宗教行動も含め幅広くとらえることが必要であるが、本研究では、測定対象は宗教意識の一部である、宗教的信念に限定する。これは信念だけに絞っても、それを正確に測定しようとすると、少なくとも最初の試行の段階においては、100 以上のかなりの数の質問文を用意し、調査を行う必要があることが予想されるため、まずは宗教的信念といわれるものに限定する。

つぎに宗教的信念を多次元的に測定するという立場でデータを分析する。宗教性や宗教意識については、一次元的に測定するという立場もある。たとえば、「あなたは宗教を信じていますか」という一つの質問文で宗教がとらえられるという立場も、あながち間違いではなく、とくに国際比較研究においてはかなり有力な測定の一つであるといえよう。しかしながら、一方で、Glock and Stark(1965) 以来、宗教性は多元的にとらえる研究が進められ、Hill and Hood eds.(1999) では、宗教的信念の尺度だけでも、Certainty in Religious Belief Scale や Christian Conservatism Scale など 21 個の尺度が紹介されている。このようにこの 50 年の間で進められてきた宗教性を多元的にとらえる研究の流れに則して、宗教的信念を多元的にとらえ、分析することとする。

また、これまでの宗教性、宗教意識の研究は、先の Manabe (2011) の指摘からも明らかなように、キリスト教を対象としていたといえるだろう。グローバル化された国際比較研究の中では、特定地域で栄えた宗教（キリスト教）を対象に測定を考えるという立場では不十分である。もちろんこのような指摘は、われわれ日本人だけが感じているだけではなく、これまでのキリスト教的な宗教性の尺度は、ムスリムを正しく測定していないのではないかという疑念も出されている。そして、ムスリム用の宗教尺度が独自に作られている (Krauss et al.2006、Montaz et al. 2010) が、ムスリムだけにあてはまる宗教性の尺度も国際比較研究にはふさわしくないだろう。また、マレーシアでムスリム、ヒンズー教徒、仏教徒、キリスト教徒に当てはまる宗教性尺度を作ろうという試みもあ

るが (Krauss et al. 2007)、その統計的な分析結果からは、共通の尺度であると言うことは難しい。

このように、ユダヤ＝キリスト教文化圏だけに適用できるのでは十分ではなく、イスラム圏にのみ適用できる尺度も不十分であることは明かであろう。本研究では、キリスト教、イスラム教を始め、日本や他の仏教、道教などの宗教伝統の中でも通用する宗教性の尺度（宗教的信念に限定して）の作成を試みる。

2-2. 質問文の作成手順

宗教的信念を測定する尺度を構成するための方法は、以下の通りである。まず、宗教教義や国内外の学術的な宗教理論を文献や事例から収集した。ついでそれらをデータベースに入力し、多くの教義や宗教理論に含まれる複数の宗教概念間の関係をデータベース上で整理した。次に、同じデータベースにこれまでの宗教性の研究で用いられてきた国内外の質問文を入力し、宗教概念と質問文の相互関係を整理した。ここでデータベースを活用する利点は以下の２点である。

第一に、これまでの宗教性の尺度の研究では、対象が特定の宗教文化であったために、各宗教固有の表現が使われていた。たとえば普通に英語で God、church、heaven と表記した場合には、それらはキリスト教での神や教会や天国を指していると考えてよいだろう。したがって、「神を信じるか」と尋ねられれば、仏教徒は「仏様は信じているが、神様は信じていない」ので、つまり「いいえ」と答えることになる。信仰の対象を信じているという点では同じ信念の表明が、全く反対の回答になる。それを避けるためには、それぞれの宗教伝統ごとに同じ意味の質問を、用語のみ代えて用意しなければならないのだろうか。それでは膨大な数の質問文になる。そこで本研究では、ひろく仏教・神道・キリスト教・イスラム教などの各宗教伝統の教義を探索し、そこで述べられている信念を信念要素に分解した上で、各宗教伝統の専門用語に拘泥しない表現で質問項目を用意する。例えば、超越者に対する信仰という信念要素（あるいは宗教的な概念）を作り、それに対して、ある伝統では「神様を信じますか」と尋ね、ある伝統では「仏様を信じますか」と尋ねている、その質問文を関連づけるのである。さらにそれぞれの宗教伝統に固有の言葉をその宗教を知らない人たちにもわかるような言葉で尋ねる必要がある。キリスト教の「終末」や仏教の「輪廻転生」という言葉は、それぞれの宗教の信徒には理解されるだろうが、その宗教をよく知らない人には理解できないだろう。そこで、対応する信念要素は、「世界には終わりがある」「人は生まれ変わる」などのより平易で一般的な質問文に直す。そうすることで、回答者は、信じたり、拒絶したりする宗教の教義にかかわらず、各宗教の信念要素の内容そのものを検討することができ、宗教性の共通性と各国の個別性を的確に検出することができる。信念要素とその上位にある宗教概念、さらには具体的な質問文の対応関係を保持して検討するためには、データベースの関連づける機能が必要である。

第二に従来の研究においては､信念要素（あるいは宗教概念）と質問文の間を手作業で、結びつけたり、切り離したりしていた。しかし、候補となる宗教上の要素は数百、これまでの使われた質問文は数千個に上るであろうから、その組み合わせは膨大な数で、人の手と頭で一つ一つの組み合わせを検討していては、組み合わせが多すぎて到底管理しきれない。網羅的に、システマチック・広範囲かつ詳細な理論的検討を可能とするには、データベースを活用し、組織的、系統的に検討するより他に方法はない。

以上の点でデータベースの利用は不可欠である。つぎに重要なことは宗教的信念に関わると思われる項目をできるだけ多く、理想的には漏れなく挙げ、それをデータベースに入力することである。国内外の宗教理論、特定宗教の教義、宗教教義に関する啓蒙書などを参照し、幅広く宗教概念とそれに関する質問文をデータベースに集めた。このようにして集め、精選した 100 項目については､2010 年に質問紙を作成し、アメリカと日本でインターネットで調査した [2)]。

本調査では、その質問紙とその元となったデータベースを今一度新たな研究組織のメンバーで検討し、新たな質問文を加え、いくつかの質問文は削り、また従来の質問文の表現を検討して修正する作業を行った。このようにして、新たに 188 の質問文が作成された。

3．調査の概要

3-1. 調査の方法

調査は、インド、トルコ、日本、アメリカ、イタリア、台湾、タイ、ロシアの 8 カ国で、調査会社を通してインターネット調査を実施した。対象国は、世界の主要な宗教を信じている人が多い国を選び、なおかつインターネットで調査可能かどうかを考慮した。すなわち、世界で一番信仰者数が多いキリスト教は、カトリックとしてイタリア、プロテスタントとしてアメリカ、ロシア正教としてロシアを対象とし、２番目に信仰者が多いイスラムとしてトルコ [3)]､３番目に信仰者が多いヒンドゥーからはインドを対象とした。仏教や道教などは信仰者数が世界的に見てあまり多いとはいえないが、異なる宗教ということで対象とし、仏教はタイ、道教は台湾 [4)] を対象とした。

調査票は日本語で作成し、翻訳会社に委託して、インドは英語、トルコはトルコ語、アメリカは英語、イタリアはイタリア語、台湾は中国語繁体字、タイはタイ語、ロシアはロシア語に翻訳した [5)]。

調査内容は、属性については、性別、年齢、職業、居住地、学歴で、アメリカについては人種・民族を質問に追加した。宗教に関する意識項目は、全部で 188 項目であり、そのうち全員に尋ねた項目は､5 項目である。それ以外の 183 項目は､3 グループに分け、61 項目ずつを対象者に質問した。第 1 グループの回答者は 8 カ国で 3,053 人､第 2 グループの回答者は 2,969 人、第 3 グループの回答者は 3,049 人である。

本調査の質問文においては、宗教伝統、宗教文化によらない一般的用語に置き換えるように努力したが、「神」や「仏」などの超越的あるいは、神聖な対象を指す言葉を置き換えることはできなかったため、以下のような注釈をつけて調査を実施した。

> この調査は国際比較研究の一環として実施しています。そのため、特定の文化や宗教などに偏らないような表現をあえて用いていますので、質問の中には聞きなれない言葉やあいまいな言葉が含まれている場合がございます。ご自分の信仰や考え方に従って、あてはまるものをお答えください。
>
> あなたは、次のそれぞれについて、賛成しますか。あてはまるものを選んでください。
> ※「神」や「魂」という言葉を含んだ質問がありますが、これは特定の宗教教義の用語ではなくあくまでも一般的な表現です。あなた自身が「神」や「魂」という言葉で考えることに置き換えて、お答えください。

回答者に提示された選択肢は、「反対」、「どちらかというと反対」、「どちらともいえない」、「どちらかというと賛成」、「賛成」のほかに、「答えたくない」という選択肢と「意味が理解できない」という選択肢を設けた。本調査研究の場合、多くの質問文が新たに作られていること、そしてそれらの質問文が 8 カ国の言語に翻訳された後に同じ意味を伝えていることが望ましいが、各国によって、「神」や「霊」などの指すものは異なるので、質問文が理解されたかどうかを確認するために「意味が理解できない」という選択肢を用意した。また、183 項目それぞれについて、「コメント欄」として自由回答欄をつけ、疑問や意見がある場合は記載してもらうこととした。ただし、自由回答は必須回答とはしていない。

実施開始の時期はインドとトルコが 2015 年 1 月で、その他の 6 カ国は、2015 年 3 月である。調査に要した日数（調査期間）と次に述べる年齢と性別の割り当てを満たす回収数を得るために配信した数などを示したのが表 1 である。調査完了までの日数が一番短かったのは日本であり、配信数も 7,935 と最少で目標とする回収を達成している。一方でアメリカは、期間も 8 日間と比較的時間を要し、また回収数を得るための配信数は 35,024 であり、日本の 4 倍以上であり、各国で依頼した調査会社のインターネット調査パネルの特質を表しているともいえるだろう。また、トルコと台湾は、調査期間が 12 日と時間を要している。これはつぎに示す、年齢と性別の割り当て、特に高年齢層の割り当てを満たすことが難しかったため、調査期間が長引いたものと考えられる。

表1　調査の実施状況

	調査期間	配信数	回収数
インド	9日	10,790	1,065
トルコ	12日	8,986	1,098
日本	5日	7,935	1,159
アメリカ	8日	35,024	1,224
イタリア	6日	12,217	1,306
タイ	7日	15,224	1,184
台湾	12日	16,644	1,157
ロシア	6日	15,432	1,123

調査対象者は 20 歳から 59 歳までの男女で、性別と年代を人口構成比に合わせて割り当てた [6)]。各国の割当目標の割合と実際の回収結果は表 2 から表 9 までの通りである [7)]。

表2　インドの割当目標と回収数

	割当目標			回収結果					
	合計(%)	男性(%)	女性(%)	全体(%)	男性(%)	女性(%)	全体(N)	男性(N)	女性(N)
20-29	33%	17%	16%	33%	17%	16%	340	174	166
30-39	29%	15%	14%	29%	15%	15%	305	153	152
40-49	23%	12%	11%	23%	12%	11%	243	124	119
50-59	15%	8%	7%	15%	8%	7%	158	84	74
合計	100%	52%	48%	100%	51%	49%	1,046	535	511

表3　トルコの割当目標と回収数

	割当目標			回収結果					
	合計(%)	男性(%)	女性(%)	全体(%)	男性(%)	女性(%)	全体(N)	男性(N)	女性(N)
20-29	29%	15%	14%	31%	16%	16%	343	173	170
30-39	29%	15%	14%	31%	16%	15%	338	170	168
40-49	23%	12%	12%	26%	13%	13%	289	146	143
50-59	18%	9%	9%	11%	6%	5%	124	65	59
合計	100%	51%	49%	100%	51%	49%	1,094	554	540

表4　日本の割当目標と回収数

	割当目標			回収結果					
	合計(%)	男性(%)	女性(%)	全体(%)	男性(%)	女性(%)	全体(N)	男性(N)	女性(N)
20-29	21%	11%	10%	20%	11%	10%	235	121	114
30-39	27%	14%	13%	27%	14%	13%	306	159	147
40-49	28%	14%	14%	28%	14%	14%	323	159	164
50-59	24%	12%	12%	25%	12%	13%	284	140	144
合計	100%	51%	49%	100%	50%	50%	1148	579	569

表5　アメリカの割当目標と回収数

	割当目標			回収結果					
	合計(%)	男性(%)	女性(%)	全体(%)	男性(%)	女性(%)	全体(N)	男性(N)	女性(N)
20-29	26%	13%	13%	25%	12%	13%	291	140	151
30-39	24%	12%	12%	24%	11%	12%	273	132	141
40-49	25%	12%	12%	25%	12%	13%	289	140	149
50-59	26%	12%	13%	26%	13%	14%	307	146	161
合計	100%	50%	50%	100%	48%	52%	1160	558	602

	表6　イタリアの割当目標と回収数								
	割当目標			回収結果					
	合計(%)	男性(%)	女性(%)	全体(%)	男性(%)	女性(%)	全体(N)	男性(N)	女性(N)
20-29	20%	10%	10%	20%	10%	10%	242	122	120
30-39	25%	12%	12%	25%	12%	13%	312	153	159
40-49	30%	15%	15%	30%	14%	15%	366	179	187
50-59	26%	13%	13%	26%	12%	13%	319	154	165
合計	100%	50%	50%	100%	49%	51%	1239	608	631

	表7　台湾の割当目標と回収数								
	割当目標			回収結果					
	合計(%)	男性(%)	女性(%)	全体(%)	男性(%)	女性(%)	全体(N)	男性(N)	女性(N)
20-29	24%	12%	12%	25%	12%	14%	290	133	157
30-39	27%	13%	14%	28%	13%	15%	319	144	175
40-49	26%	13%	13%	27%	12%	15%	306	138	168
50-59	23%	11%	12%	20%	11%	9%	231	123	108
合計	100%	50%	50%	100%	47%	53%	1146	538	608

	表8　タイの割当目標と回収数								
	割当目標			回収結果					
	合計(%)	男性(%)	女性(%)	全体(%)	男性(%)	女性(%)	全体(N)	男性(N)	女性(N)
20-29	25%	12%	12%	25%	12%	13%	286	139	147
30-39	28%	14%	14%	28%	14%	14%	315	155	160
40-49	27%	13%	14%	28%	13%	15%	320	154	166
50-59	20%	10%	11%	19%	9%	10%	221	104	117
合計	100%	49%	51%	100%	48%	52%	1142	552	590

	表9　ロシアの割当目標と回収数								
	割当目標			回収結果					
	合計(%)	男性(%)	女性(%)	全体(%)	男性(%)	女性(%)	全体(N)	男性(N)	女性(N)
20-29	27%	14%	13%	28%	14%	14%	302	150	152
30-39	25%	12%	13%	25%	13%	13%	279	140	139
40-49	22%	11%	12%	22%	11%	11%	244	120	124
50-59	25%	11%	14%	25%	11%	14%	271	123	148
合計	100%	48%	52%	100%	49%	51%	1096	533	563

トルコ、台湾、タイ、ロシアは各国の調査会社が持つインターネットパネルにおいて、高年齢層が少ないため、とくに 50 歳代は割り当てた分だけの回収が難しいことが予想された。トルコが男女あわせて 50 歳代の割り当てが 18%だったのに対して、11%の回収にとどまり、その分 20 歳代から 40 歳代までの年齢層が多くなったこと、台湾の 50 歳代女性のみ、割り当ての 12%に対して回収が 9 %と少なかったことを除いては、台湾の 50 歳代男性、タイやロシアの 50 歳代男女は割り当てに近い回収を得ることができた。

年齢と性別はほぼ割り当てた率で回収できたが、インターネット調査では偏るといわれる学歴について確認してみると、大幅に高学歴に偏っているという欠点は否めない。インドの場合、2011 年のセンサスデータで都市部の大学卒業者（20-59 歳）の割合を計

算すると 20%ほどであるが [8]、本データでは 92.7%が大学卒業であると答えている。台湾では、統計によると大学卒業者は 25.1% [9] あるのに対し、本データの大卒の割合は 71.4%である。その他の国の本データでの大学以上の高等教育卒業、修了者の割合は、トルコ 69.3%、日本 50.3%、アメリカ 46.1%、イタリア 39.0%、タイ 79.2%、ロシア 66.7%であり、表 10 のユネスコ [10] のデータと比べて、大きな差がある。

表10　各国の大卒者の割合

	UNESCO	本データ
インド	ー	92.7
トルコ	14.4	69.3
日本	29.9	50.3
アメリカ	31.7	46.1
イタリア	12.8	39.0
タイ	11.8	79.2
台湾	ー	71.4
ロシア	1.9	66.7

以上の点で、調査対象者は決して各国を代表するサンプルであるとはいえない。しかしながらインターネットによる調査といえども、各宗教伝統を代表する国々で宗教的信念を共通の質問で数多く質問する調査がない現状を考えれば、その結果がどのようなものになるのかは興味が惹かれるであろう。

4．結果

4-1. 信仰の有無について

まず、8 カ国の対象者の信仰の有無について、みてみよう。「あなたご自身のことについてお聞きします。あなた自身は、何か宗教を信仰していますか。」という質問に対する回答は、表 11 の通りである。

表11　国別の信仰の有無

		宗教を信仰している	宗教を信仰していない	合計
インド	度数	847	199	1046
	%	81.0%	19.0%	100.0%
トルコ	度数	962	132	1094
	%	87.9%	12.1%	100.0%
日本	度数	166	982	1148
	%	14.5%	85.5%	100.0%
アメリカ	度数	785	375	1160
	%	67.7%	32.3%	100.0%
イタリア	度数	827	412	1239
	%	66.7%	33.3%	100.0%
タイ	度数	1118	24	1142
	%	97.9%	2.1%	100.0%
台湾	度数	685	461	1146
	%	59.8%	40.2%	100.0%
ロシア	度数	789	307	1096
	%	72.0%	28.0%	100.0%
合計	度数	6179	2892	9071
	%	68.1%	31.9%	100.0%

信仰があると答えた人は、日本だけが 14.5% と他の国と比べて極端に低い。タイは 97.9%、トルコ 87.9%、インドが 81.0%とかなり高く、アメリカよりもロシアが高く 72.0%で、アメリカ、イタリアの 67.7%、66.7%と少し低くなっている。

信仰の有無とともに、信仰ありの人には、どの宗教かを尋ね、信仰なしの人には「あなたが育った環境で、影響された宗教はありますか What religion, if any, were you raised in?」と尋ねた質問に対する答えでは、インドでは、ヒンドゥー教が 76.7%、トルコでは、スンニが 68.6%、日本では仏教 33.1%、アメリカではカトリック 24.1%、その他のキリスト教 23.4%、バプティスト派 10.3%、イタリアは、カトリック 89.3%、タイは、上座部仏教 45.4%、大乗仏教 42.6%、台湾は、道教 35.3%、仏教 35.0%、ロシアはロシア正教会 74.6% であり、それぞれの国はほぼ想定されたような主要な宗教をカバーするといえる。

一方で影響された宗教も含めて「ない」と答えたのは、インドでは 1.8%、トルコでは 5.1%、日本は 53.0%、アメリカは 9.6%、イタリアは、1.9%、タイは 0.5%、台湾は 15.4%、ロシアは 10.9% で、日本の 53%という数値は飛び抜けて高く、日本以外の国は「宗教熱心な国」といってよいだろう。

4-2. 質問文の単純集計

各質問項目の集計結果については、紙幅の都合で示すわけにはいかないので、代表的な例として「人間は、宇宙と一体の大生命から生まれ、死後に再びそこに戻る」という質問に対する各国の回答を表 12 に示す。この表をみてまず、目につくのは、この質問に対して､「意味が理解できない」という回答をした人が日本だけ 22.9%と飛び抜けて多く、他の国は 3-6%程度である。この質問文は日本の新宗教の特徴とされる生命主義的救済観（對馬他 1979）の基盤となる考え方を質問文としたものであるが、日本人の多くに理解できないと回答され、またインドでは半数が賛成し、アメリカやタイ、台湾でもおよそ 3 割の人が賛成と答えるのに対して、日本では賛成する人が 6%、どちらかといえば賛成する人を含めても 2 割弱で、8 カ国中最低の賛成率である。このように単純集計を見てみると、多くの項目で日本のみが「意味が理解できない」と答える率が高く、10-20%あり、インドやトルコで全体的にどの項目でも賛成率が高く、その後にタイやアメリカが高い率で続く傾向があり、国による差異はかなり大きい。

表12　国別の「人間は、宇宙と一体の大生命から生まれ、死後に再びそこに戻る」の集計結果

		反対	どちらかというと反対	どちらともいえない	どちらかというと賛成	賛成	意味が理解できない	答えたくない	合計
インド	度数	68	53	131	228	522	32	12	1046
	%	6.5%	5.1%	12.5%	21.8%	49.9%	3.1%	1.1%	100.0%
トルコ	度数	437	93	189	107	192	57	19	1094
	%	39.9%	8.5%	17.3%	9.8%	17.6%	5.2%	1.7%	100.0%
日本	度数	157	94	401	147	69	263	17	1148
	%	13.7%	8.2%	34.9%	12.8%	6.0%	22.9%	1.5%	100.0%
アメリカ	度数	194	75	244	221	356	47	23	1160
	%	16.7%	6.5%	21.0%	19.1%	30.7%	4.1%	2.0%	100.0%
イタリア	度数	165	121	328	340	214	49	22	1239
	%	13.3%	9.8%	26.5%	27.4%	17.3%	4.0%	1.8%	100.0%
タイ	度数	152	103	254	250	335	34	14	1142
	%	13.3%	9.0%	22.2%	21.9%	29.3%	3.0%	1.2%	100.0%
台湾	度数	46	67	221	379	353	66	14	1146
	%	4.0%	5.8%	19.3%	33.1%	30.8%	5.8%	1.2%	100.0%
ロシア	度数	105	93	240	337	268	45	8	1096
	%	9.6%	8.5%	21.9%	30.7%	24.5%	4.1%	.7%	100.0%
合計	度数	1324	699	2008	2009	2309	593	129	9071
	%	14.6%	7.7%	22.1%	22.1%	25.5%	6.5%	1.4%	100.0%

単純集計によると回答の分布は国ごとで大きく異なるが、だからといって国によって宗教的信念は異なるといえるとは限らない。相関係数のパターンが 8 カ国にわたって共通のパターンがあれば、全体（8 カ国）を因子分析すれば、共通の因子が抽出される可能性がある。つぎに因子分析を行い、分析結果を検討してみる。

4-3. 確証的因子分析の結果

2 カ国の調査データに関して、共通の因子があるかどうかを確かめるためには、多母集団同時分析を行い、検証するという方法が考えられる。国の数が増えても同じであるはずだが、しかし、8 カ国となるとこの方法で共通の因子を抽出することは現実的には難しいだろう。Van de Vijver らは、対象とする国々のデータを因子分析し、ある因子構

造が確証されたらそれらの国々には共通の因子構造があると考える方法をとっているが（Van de Vijver, Valchev, and Suanet, 2009: 55）、確かに他に代わる方法はなかなか見いだしがたいので、本稿でもこの方法を採り、８カ国のデータを因子分析し、共通の因子構造が成り立つかどうかを検討する。本調査では、183 項目の宗教的信念に関わる質問文があり、一人の対象者に 183 項目の質問を尋ねるのはあまりにも負担が大きいため、サンプルを３つに分け、一人の対象者には 61 項目の宗教的信念に関する質問を尋ねている。本稿ではそのうちの１つである 61 項目の質問に対する回答のみを扱う。

表 12 でみたように、日本の場合、多くの質問文において「意味が理解できない」と答えた人の割合が高い。多変量解析をする上では、この欠損値にどう対処するかが問題となる。第 1 に考えられる方法は、「意味が理解できない」の割合が高かった質問項目を分析するデータから削除していくことである。この方法を用いれば、他の多くの国で意味が通じている質問文を日本人が理解しないばかりに削除せざるを得なくなる。この意味を理解しない日本人は一部の人なのかを確認するために、日本のデータにおいて、「意味が理解できない」と答えた人の分布を調べて見ると、１つもなかった人が 380 人中 230 人で、１－３個までは、56 人であり、４個以上の割合が、94 人で 21.6%である。その中には 61 個すべてが理解できないと答えた人が 7 人いた。そこで、４個以上「意味が理解できない」と答えた人を削除した。その結果、分析に用いたサンプル数はインドが 307 人、トルコが 319 人、日本が 286 人、アメリカが 355 人、イタリアが 381 人、タイが 355 人、台湾が 351 人、ロシアが 339 人であり、８カ国の合計は 2,693 人であった[11)]。

これらの人を対象に、61 項目について主成分分析を行い、その結果を参考とし、因子構造を仮定して、確証的因子分析を試みた。８カ国 2,693 ケースに対する確証的因子分析の結果、図１のモデルがデータに適合した。CFI は 0.949、RMSEA は 0.049 であった[12)]。

図1　8カ国の確証的因子分析の結果

因子	因子負荷量	質問項目
Ⅰ	0.785	「神」の愛を感じること
	0.804	人間と自然とは、どちらも「神」の一部であり、お互いにつながっている。
	0.808	「神」を信じることで、心の安らぎが得られる。
	0.712	世界が理不尽に見えるからといって、「神」がいないことにはならない。
	0.689	人間には、霊的に「神」に近い人もいれば遠い人もいる。
Ⅱ	0.708	信仰のために迫害されることは、大きな救いにつながる。
	0.724	「神」に祈りをかなえてもらうためには、「神」の助けへの代償として、何かを行なったり捧げたりすることが必要だ。
	0.615	人間は、死後に肉体をともなって、よみがえる。
	0.719	宗教的儀礼において、食物を食べることで、「神」とつながることができる。
	0.713	「神」を信じることで、社会的地位は上がる。
	0.763	「神」は、自分自身を否定することで、創造や救済を行う。
Ⅲ	0.602	執着がなければ、人は苦しみから解放される。
	0.75	ある人が救われるかどうかは、その人の行為や思いが正しいかどうかで決まる。
	0.571	利己心が、苦しみや不幸の原因である。
Ⅳ	0.524	「今、ここ」での瞬間を大切にすること。
	0.526	目の前のものごとに注意を集中すること。
	0.663	あらゆることに、いつも感謝する気持ちをもつこと。
	0.667	自分の思考と感情を、あらゆることに対して肯定的になるようコントロールすること。
	0.588	他者に憎しみや怒りを持たないようにすること。
	0.474	瞑想（めいそう）をすること。

N=2,693
CFI：0.949　　RMSEA：0.049

因子間の相関	
F1とF2	0.668
F1とF3	0.736
F1とF4	0.562
F2とF3	0.709
F2とF4	0.343
F3とF4	0.592

第1因子は、

・「神」の愛を感じること

・人間と自然とは、どちらも「神」の一部であり、お互いにつながっている

・「神」を信じることで、心の安らぎが得られる

・世界が理不尽に見えるからといって、「神」がいないことにはならない

・人間には、霊的に「神」に近い人もいれば遠い人もいる

の５項目からなる。この因子には､いずれも「神」が含まれており､「神」と人間の関係、世界との関係などを表しており、これを「神観念」と名づける。

第2因子は、

・信仰のために迫害されることは、大きな救いにつながる

・「神」に祈りをかなえてもらうためには、「神」の助けへの代償として、何かを行なったり捧げたりすることが必要だ

・人間は、死後に肉体をともなって、よみがえる

・宗教的儀礼において、食物を食べることで、「神」とつながることができる

・「神」を信じることで、社会的地位は上がる

・「神」は、自分自身を否定することで、創造や救済を行う

の 6 項目からなる。ここには、よみがえり、救済、救いなどの純粋に宗教的な救済に関わる要素から、何かを捧げたり、儀礼としての食やご利益的な地位の上昇までが含まれており、これを幅広くとらえて「救済観」と名づける。

第 3 因子は、

・執着がなければ、人は苦しみから解放される。

・ある人が救われるかどうかは、その人の行為や思いが正しいかどうかで決まる。

・利己心が、苦しみや不幸の原因である。

の 3 項目である。苦しみや執着、不幸などから、「苦悩観」とする。

第 4 因子は、

・「今、ここ」での瞬間を大切にすること。

・目の前のものごとに注意を集中すること。

・あらゆることに、いつも感謝する気持ちをもつこと。

・自分の思考と感情を、あらゆることに対して肯定的になるようコントロールすること。

・他者に憎しみや怒りを持たないようにすること。

・瞑想（めいそう）をすること。

の 6 項目からなる。瞑想、精神の集中、感謝、憎しみや怒りを持たないことであり、すべての事柄に対して、望ましい方向に意識を保つ状態なので、「精神の安定」とする。

因子間の相関は、第 2 因子と第 4 因子の相関が 0.3 程度とそれほど高くないのに対し、その他の因子間の相関は、非常に高く、とくに第 1 因子と第 2 因子と第 3 因子は相互に強く関連しているといえるだろう [13)]。

5．おわりに

世界の代表的な宗教をかなり熱心に信仰している国 7 カ国と日本の、合わせて 8 カ国を対象に宗教的信念に関わる要素 183 項目を尋ねた。単純集計の結果では、各国によってその分布は大きく異なり、とくに日本は多くの項目に対して否定的な回答や「意味が理解できない」「どちらともいえない」という回答が多かった。その一部の 61 項目を分析した結果、8 カ国においても確証的因子分析において、4 因子構造が確証された。以上の結果から、宗教文化としてはかなり異なる国々においても、因子分析などの多変量解析の手法を用いれば、共通の因子を抽出できる可能性はあるのではないかと考えられる。

本研究は、調査方法としても試験的なものである。まず、質問文が本当に等価な質問として翻訳されているのかについて、私たちの研究グループだけでは理解できない言語が多く、完全には確認できていない。今後、これらの言語を解する他の国々の研究者と協力していくことが必要であろう。また、本研究の調査方法はインターネット調査であり、

学歴で一部確認したように、サンプルの代表性が確保されておらず、また質問文の数が多く、もっと精選する必要があり、そのためにはこのような調査を繰り返さなければならない。また、分析に用いた総サンプル数は 2,500 を超えるが、各国ごとにみれば 300 程度であり、とくに日本は 300 にも満たず、サンプル数も十分であるとはいえない。しかし、前例のない調査で 8 カ国の人を対象に、かなり詳細に宗教意識について尋ねた調査は類を見ないものであり、その結果には一定の意義があるのではないかと思われる。

謝辞

本稿は、大正大学の星川啓慈を代表とする科研費基盤研究 A「生命主義と普遍宗教性による多元主義の展開－国際データによる理論と実証の接合」（課題番号 25244002）の研究成果の一部であり、研究分担者である関東学院大学の渡辺光一、青山学院大学の真鍋一史、関西学院大学の對馬路人、東京工業大学の弓山達也、桜美林大学の長谷川（間瀬）恵美、北海道大学の宮嶋俊一、大阪府立大学の秋庭裕、大正大学の松野智章、上智大学の島薗進との議論によって、質問文が作成され、分析結果の解釈が検討されました。ここに記して感謝します。

注

1）たとえば西山 (1990) の新宗教の組織類型の解説をみれば、日本独自の類型が用いられていることがわかる。

2）その結果は、渡辺他（2011）を参照。

3）ムスリムの多い国としてはサウジアラビアをはじめ、北アフリカ、中央アジアの国々が対象として考えられるが、インターネット調査の実施という点で可能性があるのは、トルコとインドネシアであった。トルコはイスラム教圏の中では世俗化している国といわれているが、世界価値観調査や ISSP 調査に参加しており、それらの調査による宗教に関わるデータとも今後比較することができるため、トルコを対象とした。

4）東アジアからは人口からみても社会経済的な影響から考えても、中国を対象とすべきであると考えられるが、宗教に関する社会調査実施が難しいという点で中国は対象としなかった。

5）英語に関しては、ネイティブのアメリカ人と十分にチェックを繰り返した。その他の言語については、トルコ人の宗教研究者にチェックしてもらった他は、翻訳会社の担当者に複数回にわたって疑問点を確認しながら翻訳した。なお、翻訳を依頼した翻訳会社はこれらの言語がすべて扱える、創業から 50 年以上の大手の翻訳会社である。

6）インドは、都市人口の人口構成比を元に割り当てている。

7）なお表 1 の回収数と表 2 から表 9 までの回収結果の全体数との差（たとえばインドの場合、表 1 の回収数が 1,065 で、表 2 の全体の回収数は 1,046 であり、その差が 19 である）は、回収後に調査会社でチェックし、回答として不適切なため削除したものである。

8）インドの 2011 年のセンサスデータについては、以下を参照した。http://www.censusindia.gov.in/2011census/population_enumeration.html（2015 年 10 月 1 日閲覧）

9）台湾については、http://ebas1.ebas.gov.tw/phc2010/english/51/308.pdf より計算した。（2015 年 10 月 1 日閲覧）

10）ユネスコのデータは、http://data.uis.unesco.org/Index.aspx?queryid=290 を参照。（2015 年 10 月 1 日閲覧）

11）61 項目について、尖度や歪度を確認したが、極端に歪んだ分布ではないことを確認している。

12）８カ国全体で、欠損値があるケースはすべて除いた（リストワイズ）では、ケース数は 1,971 と減少するが、GFI が 0.952、AGFI が 0.939、CFI が 0.955、RMSEA が 0.049 で、ペアワイズの場合と同じく、適合度は悪くはなかった。

13）本稿では、2.1 で明確に前提としているように多次元的な測定を目指しているため、４因子を抽出したが、さらに大きな因子を仮定する、あるいは一因子モデル、すなわち一次元として考えることもできるかも知れない。いずれにしても本稿の最大の目的は一次元か多次元かということではなく、共通の因子構造ができる可能性があるかどうかを見いだすことであり、本稿では４因子の因子構造が確証されたことに意義があり、さらに適合度のよいモデルが存在することを否定するものではない。

文献

Arts, Wil and Loek Halman, eds. (2004). *European values at the turn of the millennium*. Leiden: Brill.

_____. eds. (2014). *Value contrasts and consensus in present-day Europe: Painting* Europe's *moral landscapes*. Leiden: Brill.

Glock, Charles. Y. and Rodney Stark. (1965). *Religion and Society in Tension*. Chicago: Rand McNally.

Halman, Loek and Veerle Draulans. (2006). How secular is Europe? *The British Journal of Sociology* 57(2):263–88.

Haller, Max, Roger Jowell, and Tom W. Smith, eds. (2009) *The international Social Survey Programme, 1984-2009: Charting the Globe*. Abingdon: Routledge.

Hill, Peter C. and Hood, Ralph W., Jr., eds. (1999). *Measures of religiosity*. Birmingham, AL: Religious Education Press.

Inglehart, Ronald and Wayne E. Baker. (2000). Modernization, cultural change, and the persistence of traditional values. *American Sociological Review* 65(1):19-51.

Kaneko, Satoru. (1990). Dimensions of religiosity among believers in Japanese folk religion. *Journal for the Scientific Study of Religion* 22(1):1-18.

Krauss, Steven E., Azimi H. Hamzah, Turiman Suandi, Sidek M. Noah, Rumaya Juhari, Jamiah

H. Manap, Khairul A. Mastor, Hasnan Kassan, Azam Mahmood. (2006). Exploring regional differences in religiosity among Muslim youth in Malaysia. *Review of Religious Research* 47 (3):238-52.

Krauss, Steve E., Azimi H. Hamzah, and Fazila Idris. (2007). Adaptation of a Muslim religiosity scale for use with four different faith communities in Malaysia. *Review of Religious Research* 49 (2):147-64.

Manabe, Kazufumi. (2011). Cross-national comparison of the dimensions and structure of religiosity: ISSP 2008 data analysis. *Aoyama Journal of Cultural and Creative Studies (Aoyama Sogo Bunka Seisakugaku)* 3(1):3-35.

Montaz, Yadollah B., Rahimah Ibrahim, and Nurizan Yahaya. 2010. Mediating effects of social and personal religiosity on the psychological well being of widowed elderly people. *Omega* 61(2): 145-62.

西山茂 (1990),「組織の多様性」, 井上順孝・孝本貢・對馬路人・中牧弘允・西山茂編『新宗教事典』弘文堂 ,132-137 頁

對馬路人・西山茂・島薗進・白水寛子 (1979),「新宗教における生命主義的救済観」『思想』84(2),92-115 頁

Van de Vijver, Fons J. R., Velichko H. Valchev, and Irina Suanet, (2009). Structural equivalence and differential item functioning in the social axioms survey. In *Psychological aspects of social axioms*, edited by Kwok Leung and Michael H. Bond, pp. 51-80. New York: Springer.

渡辺光一・黒崎浩行・弓山達也 (2011),「日本の宗教概念の構造とその幸福度への効果－両国の共通性が示唆する普遍宗教性－」,『宗教と社会』, 第 17 号 ,47-66 頁

Yanagawa, Kei'ichi and Abe Yoshiya. (1978). Some observations on the sociology of religion in Japan. *Japanese Journal of Religious Studies* 5 (1):5-27.

Common Religious Factors in Religious Belief:
Result from the Survey in Eight Countries

Akira KAWABATA

Japanese studies of religion have developed unique concepts, typologies, models, and theories about religion in Japan. Conversely, it has been very difficult for Japanese scholars to compare Japanese religions with other countries' religions based on quantitative survey data. This paper reports results from a questionnaire survey on religious beliefs and suggests common factors extracted from the quantitative data.

A large body of questions on religious belief was collected by investigating many books, papers, and other materials. These questions and the religious beliefs to which they relate were compiled into a database. The database was then examined to select 183 questions that were adopted for purposes of the survey.

These 183 questions were divided into three groups. This paper shows the result of the survey using the first group of 61 questions presented to 3,053 respondents in eight countries. These eight countries were India, Turkey, Japan, the United States, Italy, Taiwan, Thailand, and Russia. We performed the survey in 2015 through a research company panel. The survey subjects were men and women, aged 20 to 59 years. Equal numbers of men and women were recruited, and the target ages were chosen so that each decade (20-29, 30-39, 40-49, and 50-59) was equally represented. The subjects were asked if they agreed or disagreed with each question, using a 5-point "agree-disagree" scale.

The responses were distributed very differently by country, with fewer "Agree" answers registered in Japan than in the other seven countries. Respondents in Japan tended more to answer "Neither agree nor disagree" or "Do not understand the meaning." These results are natural because Japan has a different religious culture from those of other countries, particularly Western countries. However, the result of confirmatory factor analysis showed that the eight countries share these common four factors of religious belief: "Notion of 'God'," "Notion of Salvation," "Notion of Suffering," and "Stable Mind."

This survey was performed over the Internet, and this survey method may have resulted in some sampling bias. Moreover, the sample size is small, and only 61 questions were analyzed. However, this study shows the possibility of finding common religious factors irrespective of religious culture or tradition.